

2002年度修士論文要旨

地方に在住する在日韓国人女性 ——高知県A町の新井家を事例として——

Struggle against discrimination: Korean-Japanese women in a rural society in Kochi Prefecture

開発・ジェンダー論コース 安養寺 智 Tomo AN'YOJI

在日韓国・朝鮮人に関する研究は多岐にわたるものの、先行研究の多くがコリアタウンがある大阪や東京といった大都市が中心であり、在日人口が少なく、拡散している地域において生活している在日韓国・朝鮮人に焦点を当てたものは少ない。そこで、本研究では在日過疎地域である高知において生活する在日韓国人女性たちの体験や思いを明らかにすることを目的とした。本稿では高知県A町で暮らす在日韓国人一家（結婚して韓国からきた1世の李正姫さん、在日2世の新井英男さん、そして彼（女）らの娘で、在日3世の新井玉子さん）にインタビュー調査を実施、日本人社会の中に孤立した形で居住している彼（女）らが、どのように生活空間を切り開いていったのか、また、エスニシティ・ジェンダー・世代の違いが彼（女）と日本人との関わりにどのように影響するのか、を考察した。

地域住民や行政のあからさまな差別に抵抗しながら、新井家の人々は徐々に生活空間を切り開いていった。そしてその際、大きな役割を果たしてきたのが、正姫さんであった。正姫さんは韓国にいるときから「チョーセンジン」として在日韓国・朝鮮人が差別されていることは知っていたが、実際に高知で生活することで、在日への差別をリアルに体感した。韓国では「ヤンバン」としてまわりから尊敬の念をもたれていた自分が、一転して「チョーセンジン」として蔑視される立場に落ち、それに対する激しい憤りがさまざまな差別に立ち向かっていく力になったと思われる。

また、A町での地域活動（町内運動会や祭り、掃除）にはすべて正姫さんが参加してきた。家庭内の責任を多く担われる女性であったことで、地域のネットワークに関わるようになった。地域との関わりが深い分、英男さんに比べて親しくしている日本人が多い。

在日2世の英男さんは日本人からの民族差別を長期間にわたって経験してきた。言葉による攻撃や身体への暴力、そしてまなざしによる暴力に日常的に曝され、学校や地域社会のなかで敵意と緊張を味わってきた。英男さんと日本人の関係は

『「チョーセンジン」をまなざす日本人とまなざされる『在日』の関係』（原尻、1998）だった。「チョーセンジン」とまなざされ、マイナス意識を一方的に日本人から付与された英男さんは日本人からの視線に過敏になり、差別をうけても反発できなかった。英男さんは日本人側が突きつけてくる理不尽な要求にも否と言わない。民族性のために幼い頃から差別を経験し、堪えるのが普通になってしまったという面もあるだろう。また、英男さんはA町で焼肉店を経営しており、そのため英男さん自身が今後の生活をA町以外で送ろうとは考えていないようである。これからもここで生活していく以上、今まで構築してきた人間関係は当然壊せない。小さな町で生き抜いていくには不当だと思っても、差別を拒否できないのではないだろうか。すでにできあがっている日本人との関係のなかで、その人々とうまくやっていくのに一番いい方法だとわかっているから意図的に「ニコニコして何も言い返さない」という面もあると思われる。

在日韓国人であることと被差別の体験がわがたくあった両親世代と比べ、3世である玉さんは民族差別を経験していない。現在彼女が親しくつきあっている友人はすべて日本人であり、日本人男性と交際している。玉さんは「在日韓国人」であることを「人と違っていて素敵なこと」だと考えており非常にポジティブに受け止めている。玉さんにとって「在日韓国人」としてのアイデンティティは多様であり、そして、日本人との交渉の場でそれを戦略的に使い分けている。彼女は文脈に応じて、「韓国人」であることを主張し、「日本人」であることを主張し、「在日」であることを主張している。彼女は日本人と対峙するとき、さまざまなアイデンティティを変化させ使い分けることで、日本人が貼りつけるラベルからすり抜けていくさまがみられた。

以上のように、新井家では一つの家族でありながら、異なった在日経験をもつ人々で構成されており、彼（女）らはエスニシティ・ジェンダー・世代によって、日本人と異なる関係を築いている。